

2DB
二次元ライトノベル文庫

あらおし悠
挿絵 神崎詩音

百合風の香る島

由佳先生と巫女少女

試し読み版

第一章

女子学園の島

006

第二章

歓迎会は深夜のベッドで

060

第三章

海水浴と巫女舞とキスと

115

第四章

先生をベットにしてあげる

168

第五章

秘密の百合巫女儀式

219

終章

百合学園島の祈り

298

登場人物紹介

せ な
瀬名ちひろ

美沙希を慕う一人。由佳にも興味を持っている。



あまのみさき
天乃美沙希

容姿端麗で成績優秀。島の伝統である巫女にも選ばれた、学園の女の子たちに憧れられる女生徒。



み う ら ゆ か
御浦由佳

離島の全寮制女子校に赴任する事になった新人教師。初めての一人暮らし&勤務で緊張している。



舌を押さえていた指を強引に振りほどく。強めの叱責で怯ませようと思ったのに、またも甘い痺れに喘がされた。両サイドから伸びた手が、左右の乳首を摘み上げる。二本の指で転がし、押し潰し、かと思うと上へと引っ張り上げられる。

「なにしてるの!? やめ……やめて、やめてえ!!」

「そんなこと言ってえ。由佳先生のちくび、コチコチだよ。自分でも分かるでしょ?」

「知らない知らないっ! ひねらないで! あん、ああんっ」

「んふふっ。甘い声……。おっぱい、そんなに気持ちいいの?」

誰かがお腹に跨がった。まるでペットの犬を可愛がるように、両手の指で首筋をくすぐりまくる。むず痒いパルスが頭のとっぺんから何度も突き抜け、そのたびに、跳ねる腰で自分に跨がる少女を突き上げる。

「き、気持ちよくなんか……。こんなこと、あう、あう……。ん、く……。きゅふうっ」

必死に歯を食い縛るも、力が入りきらず情けない吐息が漏れる。辱めに屈するのが悔しくて、今度はグッと手を握り、掌に爪を食い込ませる。由佳の抵抗に気づいたのか、そうはさせまいとするように、今度は両脇腹をくすぐってきた。切ない刺激に耐えきれず、握ろうとした手が開閉を繰り返す。その感覚は下半身にまで伝播して、ジタバタと脚を暴れさせずにいられない。しかも、左の胸の先端がいきなり温かいものに包まれた。

「ふぁう!!」

口に含まれたのだと分かったのは、ねっとりとした感触に乳首を舐め上げられてから。

たつぷりと唾液を塗りつけながら舌先で転がしたかと思うと、まるで母乳を求めるように強弱をつけて吸い上げる。それから一拍遅れて、右の乳首も唇と舌の餌食になる。

「やめて、やめなさい！　こんなの……はああう！」

「由佳先生。教師なのに、生徒に嘘つくの？」

お腹にのし掛かっている少女が、身体を倒して耳に吐息を吹きかけた。なにを言っているのか理解できず、喘ぎながら横に首を振る。すると「彼女」は、髪を梳りながら、嘲笑うように頬にキスした。

「だって、本当に嫌なら、もっと本気で抵抗するでしょ？　それをしないってことは、気持ちがいいから逃げたくないのよ」

「そ、そんなこと……！」

見透かしたような言い方に腹が立った由佳は、お腹の上の彼女を跳ね飛ばそうとして腰を浮かせる。でも、それは罠だった。お尻が浮いた隙に、足元に控えていた人にパジャマのズボンを抜き取られてしまう。まんまと挑発に乗って、彼女たちの思惑通りの動きをしてしまった。

「え……きやあ!？」

慌てて脚を閉じて脱衣を阻止しようとしたけど、遅かった。その時にはズボンはすでに膝を通過し、あっさりと足首から抜き取られてしまう。その時になって初めて、いつの間にか足の拘束が解かれていたことに気づいた。そんな気配すら分からなかったほど、上半

身への攻撃に翻弄されていた自分が情けない。相手は年下の少女たちだというのに。

（そ、そうだ。もつと落ち着かなくちゃ……。彼女たちが誰かを見極めるのっ）

相手は、おそらく四人。左右にふたり、そしてお腹と足元にひとりずつ。これを振りきるのは困難だろう。しかし聞き覚えのある声があるかもしれない。

（せめて、ひとりだけでも確定して、後は交友関係から――）

しかし、必死に自分を取り戻そうとした由佳の目論見は、もろくも崩れ去った。ぺたりとついたお尻に違和感がある。まるで、直接肌に布団が触れているような。

「ヒッ——!？」

声にならない悲鳴を上げた。脱がされたのはパジャマだけじゃない。下着まで一緒に剥ぎ取られていた。つまり、一番恥ずかしい部分を丸出し状態。

「みんな見て見て。先生のここ、すっごく可愛いよ」

弾むような吐息が、股間に吹きかけられた。それに導かれ、女の子たちが由佳の下半身に移動し始める。お腹に跨がっていた少女が向きを変え、由佳の身体にのし掛かるようにして内腿に手をかける。左右にいた娘も身体を反転させ、両側から膝を開く。

「わあ。ホントだ、まっさらって感じ。先生、オナニーもしてないんじゃない？」

「ねえ、もつとちゃんと照らして。よく見えなーい」

口々に由佳の秘部について感想を述べる少女たち。しかも、おそらく由佳の懐中電灯を使って。一番恥ずかしい部分をまじまじと観察される恥辱で、気が遠くなりかける。

「やだやだ見ないで！ お願いだから……ふむうつ!!」

「ンもう、先生。静かにしてって言ってるでしょ」

上に乗った娘が、押しつけた股間で由佳の口を塞いだ。汗かなにかで濡れた、しつとりとした下着の感触が、唇を押さえつける。そちらに気を取られた一瞬に、さらに大きく脚を開かされた。膝を折り曲げられ、腰が浮く。身体の中の秘密の場所を、さらに見やすい態勢にされてしまう。

「ふぐつ、むうううつ!!」

彼女らを振りほどきたいのに、恐怖と羞恥で身体が強張り、思うように動けない。それをいいことに、一本の指が、秘裂を下から上へ逆撫でした。

「ふつ、みゅうううつ!!」

初めて秘部に触れる、他人の指。性器の筋をなぞるように繰り返し撫でられ、衝撃の波が背筋を通って頭の中を掻き回す。

「ん、ひつ、んあ、ンきゅつふ」

「あは、先生って、反応いいねー」

撫でられるたび、痙攣したようにヒクヒクと全身が跳ねる。彼女たちを面白がらせてしまふと分かっているにも止められない。次第に指の動きが早くなり、ぴつたりと閉じた秘裂を開こうとするように、陰唇を左右に震わせる。

なによりも由佳を戦慄させているのは、それが不快でないということだった。

(な……なんで？　こんな、誰かも分からない人に弄ばれているのに……)

全身を襲う痺れが甘い。ともすれば、その感覚に気を許してしまいそうになる。気をしつかり持てと自分に言い聞かせようとした、その時。

「ンッ、ひいひいッ!!」

あまりにも鮮烈な電流が、ビリビリと全身を駆け抜けた。性器の割れ目の上端、小さく敏感な肉芽が、痛いほどに痺れる。

「気をつけて。初心者にクリちゃんは強すぎるから」

「ごめん。つい、いつもの癖で」

仲間同士で忠告している。由佳は、胸が大きく上下するほど「はあはあ」と息を荒らげながら、それをぼんやり聞いていた。

(な、なにこれ……。すごい……)

クリトリスが快感器官であることくらい分かっているけど、頭が真っ白になるほどの衝撃に思考が鈍る。性器を見られていることすら忘れ、腰を小さく引き攣らせる。

「じゃ、今度は優しくしてあげる……」

妙に穏やかな声が、脚の間から囁きかける。それは、嵐の前の静けさだった。ねっとりとした感触が、秘裂をゆつくりと舐め上げる。

「ひ……あ、なにこれ……いや、いやあああッ!!」

淫核を触られたほどの衝撃じゃない。けれど、柔らかくて熱いなにかが、身体の奥にじ

わじわと侵食していく。

（これ……舌？ 舐めてるの？ 私のそこを……!!）

信じられない。けれど股間でクチュクチュと響く水音が、由佳の耳を卑猥にくすぐる。

「や、やめなさい……汚い！」

「ん……汚くなんてないよ。由佳先生の、とつてもいい匂いで、美味し……。ちゅ、ぺろぺろ、れろ、じゅるっ」

「嘘よ、そんなの……。ふあふあ、あ、あ……！」

次第に舌が早くなる。陰唇を割って、奥に入り込んでくる。まるで女性器の全部を味わうように、螺旋を描きながら掻き回す。舌の動きに操られ、浮き上がった腰が円を描く。恥ずかしいのに、自分の身体なのに、止めることができない。

「うわあ。先生の腰、えっちい動きい」

「そ、そんなこと言ったら……だめ、だめ、あう！」

からかう声に反論する余裕すらない。しかも淫核を弾かれた。さっきは痛いほどだったのに、甘美な電撃に背中がくねる。

「は……あ……。お願い……。もう、もう……」

身体がどんどん熱くなる。全身を異様な痺れが駆け巡る。この先に取り返しのないことが待ち構えている予感が出て、何度も中断を懇願する。けれど、舌は容赦なかった。先端を硬く尖らせると、抉るように膣口を突いた。

「ひっ——!!」

入ってきた舌先は、ほんの一、二ミリ。けれど、メリメリと身体を割りながら異物が侵入してくるイメージが、由佳をこれまでにないパニックに陥らせた。

「やめてやめて! バージン奪わないで!!」

舌なんかで処女を奪えるわけがない。けれど今の由佳に、それを冷静に判断できる余裕なんて、毛の先ほども残っていないかった。

「大丈夫だよ先生。そんなこと、絶対にしないから」

「ほ……本当? 本当にバージン破らない?」

恐怖のあまり、子供のような口調になる。そんな情けない教師を、生徒たちが髪を撫でてなだめながら、手首を縛っていたタオルを解いてくれた。

「ホント、ホント。だって女の子同士だもん。だから安心して、いっぱい気持ちよくなっているんだよ」

ちゅつと、頬にキスされる。震える両手が、両側から握られる。こんな一方的な行為をされているが、由佳は同性という安心感にすがり、彼女たちの言葉に従った。

「じゃ、今度こそ先生をイカせてあげるね。……じゅる、じゅるるるっ!」

「ひッ、あああああっ!」

今までの愛撫だつて十分に強烈だった。けれど、そんなものは手加減だったと教えるように、舌が陰唇を掻き回す。淫核を素早く振動させる。性器から頭の中へ、電撃をダイレ



「そうよ、先生！ 美沙希さんに聞こえるくらい大きな声でイッちゃって！」

いきなり、我に返らされた。そうだ、廊下の向こうには美沙希がいる。どうしてこんな瞬間に思い出させたんだろう。恨むけど、もう冷静に戻る境地なんて、とつくに通り過ぎていく。それだけじゃない。あの少女の顔を思い浮かべた途端、悲しみと悦びがモザイク模様のように混ざり合い、全身の血が沸騰する。

「ひ、ひあ……ひあ！ いくいくいく……私、イッ………くうううっ!!」

これまでにない激しい絶頂が全身を貫いた。折れそうなほど背中を弓なりに反らせながら、収縮した性器がちひろの顔めがけて熱い飛沫を吹きつける。

「ああん、すごい……。先生ったら、潮吹いちゃったあ」

彼女はそれを避けようとせず、嬉々として受け止めた。うつとりと目を細め、唇に飛んだ雫をぺろりと舐め取る。内気だと思っていた少女の淫猥な表情に、由佳の背筋は戦慄にも似た快感で再び痺れた。彼女は内腿を濡らす恥液にまで舌を伸ばし、啄みながら吸い取っていく。しかし絶頂直後の敏感な肌に、その仕打ちには辛すぎた。

「ひっ!! や、やめて……くすぐりたい……ひいっ！」

逃げようとする腰を押さえ、彼女は絶頂痙攣中の淫裂まで掻き回した。あまりの刺激に悲鳴が裏返る。さすがにやりすぎたかと思ったか、ちひろは由佳の身体の向きを変え、ベッドに横たわらせてくれた。ずっと下半身が浮いた状態だったので、安定した姿勢に一息

吐く。しかし、それも一瞬。

「えへ、せーんせー」

ちひろが、荒い息で喘ぐ由佳の上に飛び乗ってきた。首の下に腕を回して、肩をしつかり抱き締め、右手を震える脇腹に這わせる。

「や、やめてっば！ 私まだ……ひつ、ひ……つく、ンきゅ！」

ただでさえ弱い場所なのに、敏感になった肌の過剰反応に、小刻みな悲鳴が漏れる。彼女はそれをキスで塞ぎながら、脚の付け根を刷くように爪で上下にくすぐった。

「だーめ。今夜は、先生を完全にあたしのものにするんだから」

「え……？ あなた、なにを言っ……ひんッ!!」

淫核を弾かれた衝撃で両脚が伸びる。痺れる性器を、今度は癒すように撫でながら、勝ち誇ったようにちひろが囁きかけてきた。

「あたしね、先生。美沙希さんのことが好きなの」

知っている。今だって、その気持ちに変わりはないだろうと思っっている。でも、それがなんだというんだろう。

「でもね、美沙希さんは、あたしをカノジョにしてくれないの。いくら好き好きアピールしても、エッチでご奉仕してもよ。ひどいと思わない？」

「あ……や、きゅふン！」

話しながら、ちひろがクリトリスを指で転がす。ちゃんと聞いてあげたいと思っている

のに、強烈な快感電流が思考を乱す。

「それでも、美沙希さんには感謝してるんですよ。内気で、友達のないあたしに声をかけてくれて……気持ちいいことも、いっぱい教えてくれて」

「ふあ、ふあ！ やめてっ、はああああッ！」

話の途中で、いきなり四本の指で陰唇を震わせ始めた。まだ痙攣が収まりきっていない肉壁が苦痛に近い痺れに襲われ、膝が引き攣る。堪らず彼女の腕にしがみつく。

「でも、だんだん物足りなくなっちゃったんです。ほら、あの人、他にもいっぱい遊び相手に囲まれてるじゃないですか。あたしも、ああいうことしたいなって……たくさん女の子と、もっと楽しいことしたいって、思うようになったんです」

衝撃に耐えながら、必死に彼女の話に耳を傾ける。そして鈍る頭で理解する。きっとちひろも、最初は単純に美沙希のことが好きだったに違いない。でも、孤独を癒してくれた人への感謝と憧れが強すぎたのか、次第に美沙希と自分を同一視し始めた。そこまで極端ではないにしても、恋人にしてくれないなら、自分が美沙希のようになればいいと思ってしまうたんだろう。

「で、でも待って……。そうしたら、私のことは……」

「言っただけでしょう。あたしは美沙希さんが好き。先生のこととも好き。だって、命の恩人だもの。好きになっちゃったんだもん」

その瞬間だけ、ちひろから笑みが消えた。真剣な眼差しは、嘘でも冗談でもない物語

る。由佳との恋人宣言なんて、からかっているだけか、それとも美沙希へのあてつけに過ぎないと思っていたのに、それだけじゃないと真面目に訴えている。

「でもね、そうしたら……」

次に彼女が見せたのは、渋い表情。まるで恨み節のように眉を寄せ、唇を尖らせる。

「美沙希さんは、あたしを捨てたの。先生のことを好きになったのが気に入らなかったのかは分からないけど、だんだん相手にしてくれなくなるし」

「それって、二股なんじゃあ……」

むしろ、美沙希の反応が普通に思える。しかしちひろは、由佳の言葉が理解できないかのように首を傾げ、平然と続けた。

「だから、あたし、美沙希さんに仕返しすることにしたの」

それは仕返しというより逆恨みだろう、なんて、呑気なことを考えられる余裕は、ほとんどなかった。蜜壺恥裂をぐちゅぐちゅと掻き回されて、快感に打ち震える方を優先したい誘惑に駆られる。それでも必死に理性を繋ぎとめ、続きを聞き逃すまいと唇を噛む。

「あたし、美沙希さんの取り巻きを奪っちゃおうと思ってるんだ。今はあの人の人気が高いから、すぐには難しいだろうけど……」

言葉の割に不敵そうに微笑んで、ちひろは、由佳の硬く結んだ唇に口づけた。

「まずは、先生からあたしのものにする！」

なにを勝手なことを。取り巻きを欲しがるのは自由だけど、本人の意思を無視してコレ

クシヨンのように奪い合おうだなんて。

そんな憤りは、口にする前に空中に溶けていった。指先が膣口に潜り込んで、内壁を擦る。その螺旋のような動きに合わせて腰が円を描いてしまう。

「やめ……だめ、やめて……や……あつ!!」

背中が反り、突き上げられた胸の先端を甘噛みされた。ひりひりするような快感電流が乳房の頂上から麓を渦巻きながら往復する。

「ひはっ、あひっ、ん、あ、ひゅあっ!」

自分でも意味の分からない奇声が漏れる。もう、どこを触られても、どんな愛撫でも、身体全体で快感を覚えてしまう。脇腹や首筋を逆撫でされただけで軽く達し、ちひろの指を飲み込んだ股間から恥液を飛ばす。

「先生すっごい。あたしの指、啜えて離さないよ。うわあ、奥まで飲み込まれちゃう」

「言わないで! やだ、やあああ……」

恥ずかしいなら突き飛ばせばいい。けれど、膣壁を引つ搔くようにくすぐられると、堪らない快感でシーツを握り締めることしかできない。彼女の愛撫に合わせて腰が波打ってしまうけど、それすら止めることもできなかった。

「あははっ。先生の腰、やらしく動いてる。ほら見て、すっごく、えっちいよお」

見なくたって、自分の身体がどれだけ反応しているか分かっている。それを嘲るように見下ろすちひろの眼が、由佳の欲情をさらに煽った。辱めを受けるほど、そこから逃れよ

うとして快感にのめり込む。彼女の指で自慰をするように、自分で激しく腰を動かす。「はあ……先生の中、とろとろで気持ちいい……。ねえ由佳先生え、このまま、バージン奪っちゃって、いい？」

小首を傾げ、うっとり囁くちひろの言葉に、快感に溺れていた身体がビクリと強張る。膣に刺さった指が奥まで突き進もうとする気配に、本能的な恐怖を覚える。

「や、やめて……それは許して……」

ふるふると首を振る。彼女はそれを聞き入れようとしない。訴えを無視して、さらにもう一本、膣口に指を添える。膣口が強引に開かれようとする危機感が、由佳に心にもないことを口走らせた。

「ほ……本当に駄目っ！ 他のことならなんでもするから！」

もつと他の言い方が、例えば叱りつけることもできたはず。なのに、由佳は懇願してしまった。彼女の、不気味なほど無邪気な笑みに本気を感じ、竦み上がった。

それに——どうしてだろう。処女を請われた瞬間、美沙希の横顔が頭をよぎった。

「んー。まあ、いきなりはびっくりするよね。じゃあ今日のところはバージンは許してあげるから、そうだなあ……」

ちひろが唇に指を当て、楽しそうに思案する。もしかしたら、由佳からその言葉を引き出そうとする策略だったのかもしれない。考えるふりをしているけれど、最初からなにするか決まっているようにも見える。

しかし、要求は意外と簡単なものだった。

「まずは、キスして」

唇を突き出してきた。次があることを示唆しているのが気になるけれど、それで許してもらえらなると、彼女の首を抱き寄せた。

「ん……んっ!!」

いきなり舌に絡みつかれ、後頭部が痺れた。まずは、なんて前置的な、生易しいものじゃない。口腔を犯すような激しいキスに、由佳も思わず夢中になる。さっきのように唾液を掻き混ぜ、ねっとり粘液を、ずるずると音を立てながら相手に送ったり吸ったり。

「あはあ……ふふふっ」

いったん顔を離れたちひろが、唇から唾液を引きながら妖しく微笑む。それを見ただけで、脚の間の淫裂が欲情に疼いた。

「は……あ……」

それが、顔に出た。無意識に突き出した舌にちひろが吸いつく。由佳も顔を傾けて、擦りつけるようなキスでそれに応える。舌が触れ合うのがあまりに気持ちよくて、意識が朦朧となってくる。

「んふふふ……じゅるう!」

「ふあああ!!」

ちひろが大量の唾液を舌で掬め捕った。衝撃で、背筋を痺れが走る。一瞬だけ意識が飛

んで、もしかしたら軽く達したのかもしれない。唇の端から涎を垂らして喘ぐ由佳を、細めた眼で見下ろすちひろに美沙希が重なる。

「はあ……はあ……」

「先生、いい顔してる。それじゃ、ロストバージンの代わりに、今日は別の初めてをもらつちやうね」

「別の……初めて？」

「だいじょーぶ。痛いことしないから。先生、うつ伏せになつて」

怯える由佳をなだめるように、ちひろが微笑む。しかし、その笑みこそが怖い。とはいえ、なんでもすると約束してしまった手前、逆らえない。彼女の様子を窺いながら姿勢を変えると、いきなり「よいしょ」と腰を持ち上げられた。

「きやあ!？」

顔をシーツに押しつけて、下半身突き出す格好。これまでで一番恥ずかしいし、相手が見えないのがなにより不安。

「……先生、ここは初めてだよね」

「ここつて、どこ………ひっ?! な、なにを……ちよ、ひい いっ!!」

急に密やかになった背後の声に嫌な予感を覚えるより早く、異様な感触が襲った。警戒していた恥裂ではなく、まったく予想していなかった場所を舌が這う。

「そこつ、やめ……そんなとこ……やあああ!!」

信じられなかった。そこは、お尻の穴。性器へのキスだって最初は驚いたのに、そんな場所に口づけるなんて想像もできない。

しかしそんなことより、もつと大変なことが由佳の身体に起きていた。全身が総毛立つような違和感。というより、虫唾^{むしず}が走ると表現して差し支えないほどの嫌悪感に大声で悶え、呻きを上げる。

「ああああ……ああああっ!!」

「んふ、先生のお尻、綺麗。可愛い。……ちゅ」

「ひっ!? や、やめ……そんなとこ、きたな……ひッ、ひあ、ふあああう!」

「女の子の身体には汚いところなんてないって、美沙希さんが言っていました。んふっ、このびっくりしてるうちが一番気持ちいいんですよ。だから、たっぷり楽しんでください!」

ということとは、この愛撫も最近になって美沙希から教えられたんだろう。

「あなたたち、どこでそんなこと覚えて……ふあ、あう、ん……ン……ッ、きゅふっ」

やめさせようにも、身体が言うことを聞かなかった。お尻から這い上がる鮮烈なむず痒さが全身を包み込む。それは、間違いなく快感だった。でもお尻で気持ちよくなっている事実を受け入れられず、身体に理性が抵抗して、頭の中をぐちゃぐちゃに掻き回す。

「あああう、ああああう!」

シーツを必死に握り締め、知性がなくなったように喘ぎ続ける。それほどまでにお尻の快感は衝撃的。しかし絶頂に至るほどの強烈さでないことも、また由佳を悩ませていた。



なんだか強引に話を逸らした。怪訝な顔になった由佳に、いきなりちひろが体重をかけてきた。背後に倒れそうになるのを、美沙希が胸で受け止める。

「あ、危ないでしょ……ふぁ!？」

美沙希は由佳をゆつくりと寝かせ、横たわるのを待ちきれないようにちひろがキスをしてくる。そして美沙希は、今度は彼女の後ろに回って紐を解いた。自由になった彼女は両手で由佳の顔を挟むと、口腔に挿し込んだ舌を暴れさせた。

「あふ……ん、む、あふ……んむう！」

さっきの話を聞いていたのかと疑いたくなるほどの、激しい舌使い。しかし彼女の愛撫はそれだけにとどまらなかった。両手は頬に添えられただけではなく、指先が耳の穴や耳朶を細かくくすぐり始める。

「ひっ……はッ、あっ……ふぎゅっ」

堪らないゾクゾクに、由佳の脚が思わず伸び縮みする。自分も彼女の肩を掴み、夢中で舌を貪った。淫らなキスに耽っていると、不意に胸を撫でられる。閉じていた目蓋を開けると、いつの間にか全裸になっていた美沙希が、微笑みながら手を伸ばしていた。

「ちひろ、わたしも由佳先生とキスしたい」

交代を促すと、ふたりは場所を入れ替えた。美沙希が、舌を伸ばしながら覆い被さってくる。その横でいそいそとちひろが服を脱ぐ。そして由佳の背中を持ち上げると、ワンピースを脱がし始めた。美沙希もキスをしながらそれを手伝う。

「……………あんっ」

ブラも外され、乳房が解放される気持ちよさに、思わず声を漏らす。間近で美沙希が微笑んで、恥ずかしくなった由佳は唇をぶつけた。さらにそこへ、背後からちひろが首筋に吸いついてくる。震えるような快感が背筋を走り、思わずお尻が浮いてしまったのを利用して、ふたりがかりで由佳のパンツを剥ぎ取った。

「あ……………やだ……………恥ずかしい……………」

羞恥に身をよじると、ふたりが前後から抱きついた。ちひろの胸は美沙希よりも小振りながら、肩甲骨に当たるコリコリした乳首の感触が、心臓の鼓動を跳ね上げる。そして前では、ふわりとした美沙希の乳房が、由佳の胸を包み込む。硬く尖ったふたりの乳首が絡み合い、擦れ合い、微弱な快感電流が全身を痺れさせる。

「あ、いい……………ふたりの肌、気持ちいい……………ああッ!？」

滑らかな裸身の触れ合いにうっとりしていると、左右の耳に舌を挿し入れられた。

「そ、それダメっ! か、感じすぎて……………や、やだ駄目、ホントに……………ひいいッ!」

耳から生まれる強烈な快感が全身をくすぐる。舌と唾液が奏でる粘着音で頭の中を掻き回され、気の変になりそうになった由佳は、堪らず両手両足で美沙希にしがみついた。乳房同士が密着し、堪らず自らぐりぐりと円を描くように擦りつける。快感に苦悶する由佳の喘ぎを、美沙希の唇がキスで吸い取る。でもそれを見ていたちひろも、そろそろ我慢できなくなってきたらしい。

「美沙希さんばかりずるいです！ あたしも先生とお……」

そう言いながら、脇からキスに割り込んできた。しかし美沙希は譲ろうとしない。ふたりは由佳の唇と舌を、強烈に吸いながら奪い合った。

「ちよ、ふたりとも……あふ……譲り合いを……あふつ、んむ……ッ、みゆううんっ！」

さつき相手を思いやる大切さを理解してくれたはずなのに、そんなものはお構いなし。仲介するように割り込ませた由佳の舌は両側から吸われ、頭を芯まで痺れさせる。しかしやがて、狭い場所での争いは混戦となり、誰と誰がキスしているのか分からない状態に。

「ちゆ、ふあ……由佳せんせ……美沙希さ……ふあ、あ……ああああんっ」

ちひろの感じている声が、由佳を激しく欲情させる。彼女の小さな胸に手を伸ばして揉みしだくと、身じろぎする感触が伝わって、自分の胸も激しく高鳴る。しかもそこを、美沙希が驚掴みにしてきた。四本の指で乳房を揉み、人差し指が乳首を弾く。

「はう！ あ……あっ！」

尖った肉蕾（ちひま）を擦られるたび、甘い痺れが上半身を覆ってゆく。背中が仰け反って身体を支えきれなくなると、ふたりがかりで畳に押し倒された。しかも彼女たちは、まるで示し合わせたように同じ動きで由佳の乳房を揉み上げ、首筋を左右から舐め上げた。

「ふあ、ふあ……ふああああ！」

感電するような快感で、堪らず床に爪を立てた。愛撫されているのは上半身なのに、全身がびりびり痺れて、お尻が浮き上がってしまう。あまりに感じすぎて逃げようとする肩

を、ふたりはがっちりと抑え込み、いきなり乳首を咥え込んだ。

「あ、ああああう！ そんな……両方いつぺんになんて……やだ、あん、あああん」

「やだじゃないでしょ。気持ちいいでしょ」

「ああん！ でも天乃さん、感じすぎて……ひあっ!! そ、そんなに吸わないでえ！」

由佳の懇願なんて聞く耳を持たず、美沙希が嘲るような笑みで激しく乳首を吸引した。

「ほらちひろも。先生は苛められると感じちゃうんだから」

「そっか。それが、相手を思いやるってことなんですねっ」

ちよつと待つてと止める暇もない。美沙希にそそのかされて、ちひろも反対側の乳首に食いついた。しかも単に吸うのではなく、ちゃんと先輩のやり方を横目で見ながら、舌で転がしたり震わせたりと、多彩なバリエーションをつけて由佳を悶えさせる。

「さ、さっきの話はそういうことじゃ……あ、ううんっ！」

訂正しようとしたけれど、でも間違っていない気もして、しかも快感に負けて考える余裕なんて残されていない。

「先生、どう？ おっぱい、気持ちいい？」

それでもやはり、まだ自信がなかったんだろう。ちひろが不安そうに尋ねてきた。彼女なりに一生懸命なのは痛いほど伝わっていたし、間違いなく気持ちいい。

「いい……。いいよ、ちひろお……。今までで一番気持ちいい……」

由佳が熱に浮かされたような声でうっとりと言えると、彼女は嬉しそうに微笑んで、お

腹に跨がりながらキスしてきた。由佳も口腔にたつぷりと唾液を溜めて、それに応える。濡れた舌を絡み合わせると、この上もない幸福感で胸が満たされる気がした。

（そういえば私、すっかり女の子とのキスが好きになっちゃったな……）

同性となんて、ちよつと前まで考えもしなかった。でも、こんなに気持ちがいいこと、やめられるはずがない。ふわりと柔らかい女の子の唇。それに触れているだけで、堪らなく幸せな気持ちになる。

「あは、先生え……。ちゅ、ちゅば、じゅるっ」

ちひろも蕩けた表情で、由佳の唇を食った。時々少し顔を上げて、混ざり合った二人の唾液が糸を引くのを楽しんでいる。少女の舌先から伸びる粘液があまりに卑猥で、昂ぶった由佳は彼女の頭を引き寄せて、その口腔を掻き回した。

「あうん、由佳先生すご……。あぶ、すごい、ふぁ……。あん、ん、ふぁ……。ちゅぶっ！」

喘ぐちひろから唾液が流れ落ち、由佳の口に溜まって溺れそうだ。しかも、彼女はキスをしながら、まるで自慰をするように由佳のお腹に腰を擦りつけた。おへその回りに彼女の温かい愛液を塗りつけられて、べとべとになっていくのが無性に嬉しい。

しかし困ったことに、それに触発された由佳のあそこも疼き始めた。今日はまだ一度も触ってもらっていない。自慰で我慢しようとしたら、ちひろに両手の指を握め捕られた。床に押さえつけて由佳の自由を奪うと、尖らせた舌で口腔を串刺しにする。

「あ、やんっ……。ん、ふむううう！」

気持ちよすぎるキスで充足する唇と、放置された性器の落差があまりに激しく、由佳の頭が錯乱する。内腿を擦り合わせて股間の欲求不満を紛らわせようとするけれど、そんなもので事足りるはずがない。

「や……やあああん！ 誰か……誰か触って……私の……ひいいい！」

突然の快感電流に腰が跳ね上がった。鼠径部を美沙希の爪が逆撫でする。彼女の五指は太腿を下り、膝のお皿をくすぐった。

「んふ。ここ、意外と感じるでしょ。こっちも……ほら」

「ひっ!! そこ……そそそんな……どうして、ふあうっ!!」

彼女は脚の間に陣取って、両方の膝をくすぐり始めた。そんな場所で感じるとは思えないのに、あまりにも気持ちよすぎて意識が飛びそうになる。それをちひろとのキスで辛うじて繋ぎとめるけど、美沙希の愛撫は容赦なかった。

「じゃあ、今度はこっち。……ちゅ、ちゅぱっ」

「やんやん、やあああん!!」

今度は内腿にキスの雨。それだけでも気持ちいいのに、彼女の唇が次第に身体のコアに近づいて期待が高まる。

「先生、あたしも気持ちよくなりたい……」

しかしその前に、ちひろが切なげな声で由佳の顔に跨がってきた。眼前に迫る、蜜液で光る少女の性器。生々しくも可愛らしい、美味しそうな淫裂に生唾を飲み込む。自分のそ

こを触ってもらえない不満をぶつけるように、由佳は夢中で細い腰を引き寄せた。

「ああああん、先生ええっ！」

少女の甘い蜜と歓喜の声が理性を砕く。由佳は反射的に逃げようとするちひろの腰を捕まえ、尖らせた舌尖で膣口を抉った。口元を押さえていやいやと髪を振り乱す少女に興奮し、淫核を吸い上げた。

「ひいひい！ 先生それダメ！ 腰……抜けちゃう……」

泣き言に構わず追い打ちをかけようとしたその時、今度は由佳が攻撃を受けた。美沙希が足を担ぎ上げ、性器を思いきり吸い上げる。

「ふあ!? ふあふあ、ひいひいっ！」

待ち焦がれた快感が、全身を一気に駆け巡る。さんざん待たされた分を取り戻そうとするように、由佳の淫裂は大量の蜜を吐き出しながら激しく悶えた。

「先生……。はあ……。先生のここ、可愛い……。美味し……。ん、ちゅ、ちゅば、じゅるっ」

「あああ、天乃さん！ そこ、もつと……。もつと吸って！」

はしたないほど脚を広げ、美沙希の舌を大声で求める。彼女の舌が膣口を滑るのに合わせ、由佳もちひろの膣を挟り回した。舐めるのと同時に舐められる、同性の性器との卑猥なキス。倒錯した光景はあまりに甘美で、頭がおかしくなりそうだ。

（生徒とこんなことするなんて……。ああ……。私、悪い先生になっちゃう……）

でも、もう後戻りなんてできない。女の子同士で快感を与え合うことを知った悦びに、

由佳の心と身体が芯から震えた。

「あ、天乃さん……ちひろ……私、わたし……ふあ、あ、あ……あつ！」

体内で熱いものが噴き出し始めた。どこかに飛んでいきそうな浮遊感。予感に焦った由佳は、思わずちひろの淫核を激しく吸い上げた。

「ひっ!? 先生、それ強すぎ……や、やだあたし一氣に……やだもう、もう!!」

ちひろの身体が怖いほど痙攣を始める。それを見たのか、美沙希も由佳の淫裂を思いきり広げてクリトリスに歯を立てた。

「ひいああああつ!!」

快感を通り越した衝撃が身体を貫く。由佳はちひろの淫核を舌で舐め上げながら、激しく背中を仰け反らせた。

「先生、それ……それすごッ……いく、イク、いくいく、イッちやうううッ!」

「私、私もイクの、イク、イッ……くうううッ!!」

ビクンビクンと、ふたりの身体が大きく跳ねる。快感なんて生易しいものじゃない。気が遠くなりそうな痺れに全身を襲われ、痙攣が止まらない。

「あ、天乃さん助け……震え、止まらな……あう、ふあう……」

口元を愛液で濡らす美沙希に手を伸ばす。彼女は舌舐めずりしながら、由佳に微笑みかけた。どうにかしてくれるのかと思ったら。

「だーめ、先生には、もっと気持ちよくなってもらうから」

「え、なにを………ひいいい!!」

彼女は絶頂痙攣で過敏になっている淫褻を、指で容赦なく震わせた。気持ちいいどころか激しすぎる痺れに襲われ、由佳は、本当に気を失ってしまった。

目を覚ますと、まだ外はうっすら明るい。気絶していたのは一瞬みたいだ。両側には全裸の少女がふたり添い寝して、乳房を弄んでいる。由佳はそれを許しながら、ふたりに交互に口づけした。軽く唇を合わせるだけのキスなのに、幸せで胸がいっぱいになる。

「もう……ふたりのせいで、私、悪い先生になっちゃった」

「そんなことないよ。由佳先生は最高に素敵だよ」

ちひろが肩に頭を擦り寄せる。そう言ってくれるのは嬉しいけれど、本来ならば許されることじゃない。

(でも、ま……いいか)

今はこの幸福感に浸っていたい。彼女たちを感じていたい。由佳はふたりを抱き寄せる。と、その滑らかな素肌の感触を楽しんだ。

「それより先生、美沙希さんの話を聞いてあげて」

そんな中、ちひろが首に抱きつきながらお願いしてきた。美沙希が彼女に恨めしそうな目を向ける。でも由佳に見つめられると、恥ずかしそうに首を竦めた。

「天乃さん、私に話が？」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫士
セブン

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

新装版
ハルキ

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍として読めるナチネル

姫騎士 クラマート

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
「アクターズノベルズ」
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431(販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション

検索